

マロリーの *Morte Darthur* 研究

——アーサー王、ガウェイン、グィネヴィア、ランスロットの死をめぐる——

海野昭史・西善也

英語研究室

A Study of Malory's *Morte Darthur*

——The Death of King Arthur, Gawain, Guinevere and Lancelot——

Akifumi UNNO

and

Yoshiya NISHI

Department of English, Asahi University

1

サー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) の *Morte Darthur* の ‘The Day of Destiny’ ではアーサー王とガウェインの死がセットになって取り扱われている。¹しかし、モードレッドの死についてはこの章においてさほど重要な意味を担っていないように思われる。同様に、次章 (最終章) の ‘The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir Lancelot and Queen Guinevere’ においてはランスロットと王妃グィネヴィアの死がセットになって取り扱われている。そこで、拙論では、アーサー王とガウェイン、ランスロットとグィネヴィアのそれぞれの死の取り扱いに関連した tone の相違について比較しながら作家マロリーの意図を考察したい。

2

モードレッドは、アーサー王がランスロットと交戦を続けている間に、王位を篡奪し、カンタベリーで戴冠式を挙げ、グィネヴィアに結婚を迫る。これを聞きつけ、アーサー王は急遽イ

ングランドに帰国し、モードレッドとの戦いに臨み撃退させるが、ガウエインが舟のなかで瀕死の状態で倒れているのを発見し次のように悲痛な叫びをあげる。

‘Alas! sir Gawayne, my syster son, here now thou lyghest, the man in the worlde that I loved moste. And now ys my joy gone! For now, my newew, sir Gawayne, I woll discover me unto you, tha<t> in youre person and in sir Launcelot I moste had my joy and myne affyaunce. And now have I loste my joy of you bothe, wherefore all myne erthely joy ys gone fro me!’ (p. 709, ll. 24-29)

ここでは‘now’と‘joy’がそれぞれ4回繰り返されている。これらの2語を組み込んだ‘(…)ys (…)
gone!’が2回反復されている。その一つである‘all myne earthely joy is gone’における今いずこにありやという悲嘆の感情が‘now’と‘joy’と響き合って引用例全体がリズムカルな調子と格調高い tone によって伝えられている。なお、ここで取り上げた2つの章には「喜び」と「悲しみ」を表す類義語が頻出し、この二つの物語のテーマ、特に運命の車輪のテーマと大きく関わっていることを付言しておきたい。ガウエインは己の罪を後悔し、ランスロットに手紙を書くために、紙、筆、墨をアーサー王に求め、

...and I fele myselff that I muste nedis be dede by the owre of noone.

(p. 709, ll. 34-35)

と死期が近づいていることをアーサー王に告げる。この言葉どおりにガウエインが最期を迎えると、語り手は地の文で

And so at the owre of noone sir Gawayne yelded up the goste. (p. 710, l. 37)

と同様のことを繰り返す。反復表現の「確認化」である。²ケルトの伝説では、ガウエインは太陽神であり、正午までは徐々に力が増すがその後は衰えると考えられている。³このように、この2つの引用例からガウエインの死をめぐってケルトの伝説が背景にあることが理解できる。

この後、アーサー王は2つの不思議な夢を見る。夢は主人公に啓示を与えるものと考えられている。⁴その一つはケルト世界とも関わりをもつ運命の車輪に関する夢である。⁵

So uppon Trynyte Sunday at nyght kinge Arthure dremed a wondirfull dreme, and in hys dreme hym semed that he saw uppon a chafflet a chayre, and the

chayre was faste to a whele, and thereuppon sake kynge Arthure 「in the rychest」
 clothe of golde that myght be made. And the kynge thought there was undir hym,
 farre from hym, an hydeous depe blak watir, and therein was all maner of serpen-
 tis and wormes and wyld bestis fowle and orryble. And suddeynly the kynge
 thought that the whyle turned up-so-downe, and he felle amonge the serpentes, and
 every beste toke hym by a lymme. (p. 711, ll. 19-27)

運命の車輪が突然回転し、かつて栄華を誇った者は没落の道を歩む。世界に君臨したアーサー王といえどもこの中世の悲劇から逃れることはできない。もう一つは死んだはずのガウエインが美しい婦人たちを伴って現れる夢である。

Thus much hath gyvyn me leve God for to warne you of youre dethe: for and ye
 fyght as to-morne with sir Mordred, as ye bothe have assygned, doute ye nat ye
 shall be slayne, and the moste party of youre people on bothe partyes. And for the
 grete grace and goodnes that Allmyghty Jesu hath unto you, and for pytē of you
 and many mo other good men there shall be slayne, God hath sente me to you of
 Hys speciall grace to gyff you warnyng that in no wyse ye do batayle as to-morne,
 but that ye take a trefyse for a moneth-day. And proffir you largely, so that to-
 morne ye put in a delay. For within a moneth shall com sir Launcelot with all hys
 noble knyghtes, and rescow you worshypfully, and sle sir Mordred and all that
 ever wyll holde with hym.' (p. 711, l. 44-p. 712, l. 11)

夢の中で、神によって送られたガウエインはアーサー王に明日モードレッドと戦わないように忠告する。明日戦えば必ず死ぬことになることを警告するのである。この引用例には、'God'、'for the grete grace and goodnes that Allmyghty Jesu hath unto you'、'God hath sente me to you of Hys speciall grace' とキリストや神を表わす表現が集中的に使われている。この引用例の直前にも 'God hath gyvyn hem that grace' (p. 711, l. 42) というように同様な表現が使われている。ガウエインは、夢の中ではあるが、キリストあるいは神の名にかけてアーサー王に明日モードレッドと一戦を交えないようにと訴えているのである。この時点でアーサー王はいまだケルトの王であり、キリスト教の王でもある。アーサー王はこの夢に現れたガウエインの警告を受け入れモードレッドと協定を結び和解が成立する。しかし、アーサー王もモードレッドも互いに相手を信用しているわけではない。双方とも戦闘態勢を怠りなく整えている。会見は成功するかのように思われたとき、一匹の蛇が一人の騎士に噛み付いたことからたちま

ち場面は和平から死闘へと急展開する。偶発的な出来事とはいえ予言どおり運命の車輪が急展開したことを意味する。蛇は聖書のアダムとイブの場面を思い起こさせるが、運命の車輪に関する夢の中で足元の異界への入口である「深くて暗い湖」にいる（‘an hydeous depe blak watir, and therein was all maner of serpentis...[p.711,ll.23-24]）。キリスト教以前の世界も垣間見られる。頭韻詩 *Morte Arthure* では運命の車輪の描写とアーサー王の死の間はかなり時間的な隔たりがあるのに対し、⁶ マロリーのこの章では運命の車輪は急展開し、アーサー王の死が早められているのである。運命の車輪による悲劇性が強く押し出されていると言えよう。

アーサー王はルーカンとベディヴィアの二人を除いて味方がすべて殺されてしまったのを知って狂わんばかりに激怒する。

But wolde to God,’ seyde he, ‘that I wyste now where were that traytoure sir Mordred that hath caused all thys myschyff.’ (p.713,ll.25-27)

アーサー王のモードレッドに対する憎しみだけが表現されている。ルーカンは次のようにアーサー王に忠告する。

‘Sir, latte hym be,’ seyde sir Lucan, ‘for he ys unhappy. And yf ye passe this unhappy day y[e] shall be right well revenged. And, [good lord, remembre ye of your nyghtes dreame and] what the spyryte of sir Gawayne tolde you tonyght, and yet God of Hys grete goodnes hath preserved you hyddirto. And for Goddes sake, my lorde, leve of thys, for, blyssed be God, ye have won the fylde: for yet we ben here three on lyve, and with sir Mordred ys nat one on lyve. And therefore if ye leve of now, thys wicked day of Desteny ys paste!’ (p.713,ll.33-40)

キリストや神を表す表現を駆使しガウェインが警告した夢のことを思い出させようとする。瀕死の状態にあるモードレッドには構わないようにアーサー王に忠告する。しかし、アーサー王は

‘Now tyde me dethe, tyde me lyff,’ seyde the kyng. (p.713,l.41)

と言って、ルーカンの必死の助言を聞き入れようとしない。「死のうと生きようと構わない」と怒り狂うが、この表現にはアーサー王の人間としての意地だけが強調されているのである。むしろ運命の車輪の回転を押し止めることができない強力な力がアーサー王に働いているので

ある。⁷ その結果、アーサー王は‘For now have I my dethe, whereof sir Gawayne me warned in my dreme.’ (p. 714, ll. 35-36) と悔やむだけである。ルーカンの助言した‘thys wicked day of Desteny’を迎えてしまうのである。

アーサー王はベディビアに名剣エクスカリバーを湖に捨てさせることを命ずる。⁸

And there cam an arme and an honde above the watir, and toke hit and cleyght hit, and shoke hit thryse and braundysshed, and than vanysshed with the swerde into the water. (p. 716, ll. 1-3)

ケルトの伝説に基づく有名な場面である。異界の剣、エクスカリバーはアーサー王がケルトの王権を確立したことを象徴する湖の婦人から手に入れた剣でもある。ということは、この剣を失うことはケルトの王権を失うことでもあり、また人間界を去ることでもある。⁹ ケルトの伝説では湖は異界への入口、舟は異界への橋渡を表わす。そして、アーサー王はケルトの世界に運ばれていくのである。

For I muste into the vale of Avylyon to hele me of my grevous wounde.

(p. 716, l. 24-25)

異界の女王、モルガン・ル・フェイをはじめとする湖の妖精によって異界、アヴェロンに連れ去られる。アーサー王の最期はケルトの世界が色濃く反映しているのである。

このように見てくると、‘The Day of Destiny’では人間の世界とキリスト教の世界が示されてはいるものの、むしろこうした世界を覆い隠してしまうような人間の力では抗することもできない超自然的な力に支配されている。つまり、運命の車輪と蛇、そして、ガウェインに固有の力、湖に戻される名剣エクスカリバー、モルガンによって舟で運ばれていくアヴェロンに見られるケルトの神話、すなわち異教の世界が tone として色濃く ‘The Day of Destiny’ を反映しているのだと言えよう。たとえキリスト教の世界が表現されていても、背後にケルトの世界をはじめとする異教の世界が重層的に潜んでいることが理解できる。

3

次に、最終章 ‘The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir Launcelot and Queen Guinevere’ について、2つの夢の場面、ランスロットとグィネヴィアの別れの会話、¹⁰ ランスロットの修道生活、そして兄ランスロットの死を悼むエクターの挽歌を中心に見

てみよう。

夢に関する場面が2つある。一つはグィネヴィアの死がランスロットに告げられる夢である (p. 722, ll. 23-24)。この夢に対してランスロットは隠者であるカンタベリー司教から「夢に背かない方がいい」 (p. 722, ll. 29-30) と忠告される。前章のガウェインの夢に対応する。もう一つはランスロットの死がカンタベリー司教からボースとその仲間に告げられる夢である。司教が仲間にその夢を説明する次のような科白がある。

‘Truly,’ sayd the Byssshop, ‘here was syr Launcelot with me, with mo angellis than ever I sawe men in one day. And I sawe the angellys heve up syr Launcelot unto heven, and the yates of heven opened ayenst hym.’ (p. 724, ll. 25-28)

‘angellis’ と ‘heven’ がそれぞれ2回使われている。その夢はランスロットが天使によって天国の門に引き上げられているというのである。キリスト教的な色彩が色濃く現れている科白と言えよう。¹¹ この夢は前章においてアーサー王がケルトの伝説を背景にした異界のアヴェロンにモルガンと婦人たちによって運ばれていくのと対照的である。しかし、ランスロットは死後天国に引き上げられることを望むのではなく ‘Joyous Garde’ に埋葬されることを望む。¹²

この章ではケルトの要素はすっかり影を潜めてしまっているが、その代わりにキリスト教の色彩が色濃く表現されている。¹³

And yet I truste, thorow Goddis grace and thorow Hys Passion of Hys woundis wyde, that aftir my deth I may have a sight of the blyss[ed] face of Cryste Jesu, and on Doomesday to sytte on Hys right side; [fo]r as synfull as ever I was, now ar seyntes in hevyn. And there[fo]re, sir Launcelot, I requyre the and beseche the hartily, for all the lo[v]e that ever was betwyxt us, that thou never se no more in the visayge. ...[A]nd I pray the hartely to pray for me [to] the Everlastynge Lorde [tha]t I may amende my mysselyvyng.’ (p. 720, ll. 19-33)

‘thorow Goddis Grace’、‘thorow Hys Passion of Hys woundis wyde’、‘the blyss[ed] face of Cryste Jesu’、‘on Doomesday’、‘syttte on Hys right side’、‘seyntes in hevyn’、‘[to] the Everlastynge Lorde’のキリスト教に基づく表現がちりばめられている。グィネヴィアは死後天国に行けるようにこれ以上顔を合わせないようにとランスロットに懇願するが、これらの表現がグィネヴィアのこうした決意を言い表しているのである。しかし、このことがグィネヴィアの神への愛を本心から表わしているかどうかは不明である。このグィネヴィアの悲痛な叫び

を聞き、ランスロットは‘wolde ye that I shuld turne agayne unto my contrey and there to wedde a lady? Nay, madame, wyte you well that shall I never do, for I shall never be so false unto you of that I have promysed.’ (p. 720, ll. 34-37) と言って、他の婦人と決して結婚するつもりはないと哀願する。ここではグィネヴィアはともかくランスロットのグィネヴィアに対する愛がいまだ継続していることを読み取ることができるだろう。ランスロットはせめてグィネヴィアと同じ運命、すなわち修道生活に入ることを嘆願するが、王妃は次のようにランスロットの修道生活を否定する。

But I may never beleve you,’ seyde the quene, ‘but that ye woll turne to the worlde agayne.’ (p. 720, ll. 40-42)

‘the worlde’は、天上界すなわち修道生活に対する人間界を表わす。また、次の引用例において別れの間際になってもランスロットのグィネヴィアへの愛が続いていることが理解できる。

For I take recorde of God, in you I have had my erthly joye, and yf I had founden you now so dysposed, I had caste me to have had you into myn owne royaume. (p. 721, ll. 7-9)

この世の喜び（‘my erthly joy’）であるグィネヴィアを本国にお連れしようというのである。それも叶わないことが分かり、最後に望んだキスも拒否されるとランスロットはようやくグィネヴィアと別れることになる。語り手は、‘...for there was lamentacyon as they had be stungyn with sperys, and many tymes they swounded.’ (p. 721, ll. 17-19) と二人の決別の悲しみを強調する。

次にランスロットの修道生活と告解の秘跡について見てみよう。グィネヴィアと別れた後、ランスロットはかつてのカンタベリー司教に罪の告白を聞いてもらい罪の許しを請う。

And than he knelyd doun on his knee and prayed the Bysshop to shryve hym and assoyle hym :.... (p. 721, ll. 31-32)

‘shryve him and assoyle hym’はキリスト教の典型的な告解である。ランスロットは告解を許されると、神に仕え祈りと精進‘prayers and fastynges’の日々を送る。この‘prayers and fastynges’はこれ以降頻繁に生起する (p. 721, l. 35、p. 722, ll. 5-6、l. 18)。死の間際に聖体拝領と塗油の秘蹟を受け、キリスト教徒が受けるすべての償いの儀式を行なう。

S(o) when he was howselyd and enelyd and had all that a Crysten man ought to have, (p. 724, ll. 9-10)

キリスト教に関連する表現は‘The Day of Destiny’の中では前に引用例に挙げた例の他にも多少見られるが、主にアーサー王とガウェイン以外の人物に関係したものがほとんどである。一方こうした表現は最終章‘The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir Launcelot and Queen Guinevere’において枚挙にいとまがない。しかし、C. David Benson はこうしたキリスト教の意味は感傷的であり、また表層的であると論じている。¹⁴ ランスロットの死の葬儀に遭遇してエクターは次のようにランスロットのこれまでの行為と行動を称える。

‘A, Launcelot!’ he sayd, ‘thou were hede of al Crysten knyghtes! And now I dare say,’ sayd syr Ector, ‘thou sir Launcelot, there thou lvest, that thou were never matched of erthely knyghtes hande. And thou were the curtest knyght that ever bare shelde! And thou were the truest frende to thy lovar that ever bestrade hors, and thou were the trewest lover, of a sinful man, that ever loved woman, and thou were the kyndest man that ever strake wyth swerde. And thou were the godelyest persone that ever cam emonge prees of knyghtes, and thou was the mekest man and the jentylllest that ever ete in halle emonge ladyes, and thou were the sternest knyght to thy mortal foo that ever put spere in the reeste.’

(p. 725, ll. 16-26)

二人称、単数代名詞‘thou’を用いて肉親に対する親しみの感情を表わしながら、「thou were + 補語」の文を繰り返し用いている。その補語は「形容詞の最上級 + 名詞 + (前置詞句) + 関係代名詞」となっている。各半行を形成する「形容詞 (の最上級) + 名詞 + (前置詞句)」は中英語頭韻詩では頻出している。¹⁵ ただし、言語の変化あるいは詩と散文の違いということもあって、中英語頭韻詩では頭韻を踏んでいるが、引用例においてこの条件は満たされていない。しかし、‘curtest knyght’と‘mekest man’では頭韻が踏まれている。使用されている形容詞はいずれも knyght あるいは「人」を表す類義語の美点を理想化・典型化して表現している。このように分析していくと、マロリーはこの引用例において明らかに中英語頭韻詩の文体の特徴を意識して使っているものと思われる。したがって、ランスロットの死に対して発せられたエクターのいわば挽歌は伝統的なロマンスに基礎を置いた騎士道精神そのものを意図したものであると言えるだろう。¹⁶

4

‘The Day of Destiny’は、toneとして超自然的な世界、つまり異教的色彩の濃い物語に仕立てられている。こうした背景のなかでアーサー王は運命の車輪によって、ケルトの世界に連れて行かれる。これに対し、最終章の‘The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir Launcelot and Queen Guinevere’において、キリスト教の世界が色濃く表現されている。しかし、キリスト教は二次的、すなわち表層的に述べられているにすぎない。このように見てくると、‘The Day of Destiny’の世界のなかのアーサー王とガウェインの死と‘The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir Launcelot and Queen Guinevere’の世界のなかのグィネヴィアとランスロットの死は対照的な側面を浮かび上がらせてくれるのである。とすれば、最終章の物語ではキリスト教を指向しながらも到達できなかった中世の騎士道精神はランスロットの姿そのものであろう。言い換えれば、騎士道精神に内包される理想と現実のギャップがランスロットに投影されているのではないだろうか。

注

- 1 テキストは Malory: *Works*, ed. Eugene Vinaver, Oxford Univ. Press, (1971). を使用した。
- 2 Mark Lambert, *Malory: Style and Vision in Le Morte Darthur*, Yale Univ. Press, (1975), pp.8-16. 西宮満、『アーサー王の死：トマス・マロリーの作品構造と文体』、法政大学出版局、(1991)、p.135.
- 3 Ronan Coghlan, *The Illustrated Encyclopedia of Arthurian Legends*, (1991), 『アーサー王伝説事典』、邦訳、山本史郎、原書房、(1996)、p.105.
- 4 Cf. 西宮満、op. cit., p.28,55.
- 5 Miranda J. Green, *Dictionary of Celtic Myth and Legend*, (1992), 『ケルト神話・伝説事典』、邦訳、伊村君江監訳、東京書籍、(2006)、pp.130-131.
- 6 頭韻詩 *Morte Arthure* では3388行で車輪は回転しアーサー王は4327行で死を迎える。*Morte Arthure*, ed. Edmund Brock, EETS, OS 8, (1865).
- 7 Cf. Dieter Mehl, *English Literature in the Age of Chaucer*, (2001), p.216.
- 8 剣の象徴性について、cf. 西宮満、op. cit., p.25.
- 9 Richard Cavendish, *King Arthur and The Grail*, Paladin Books, (1978), p.195.
- 10 Cf. Roger Sherman Loomis, *The Development of Arthurian Romance*, W. W. Norton &

- Company Inc. (1970), p.184.
- 11 C. David Benson は 'But once again Malory's heaven is asserted rather than realized. Gawain, Guinevere, and Lancelot take moral responsibility for their lives as they die, but rather than looking forward to the New Jerusalem, they look back at the glories that were in Camelot.' と述べている (C. David Benson, 'The Ending of the *Morte Darthur*', *A Companion to Malory*, ed. Elizabeth Archibald and A. S. G. Edwards, D. S. Brewer, (1996), p.237.)。
- 12 ギネヴィアはランスロットとの不義が発覚され火あぶりの刑に処せられることになるが、ランスロットはギネヴィア救出後、'Joyous Garde' に連れて行く場面がある (p.684, ll. 38-39)。
- 13 Roger Sherman Loomis は 'When battles and tournaments pall and magic and marvels lose their charm, there are heavenly visions and powerful scenes of psychological conflict and grim tragedy.' と論じている (op. cit., p.173.)。この傾向は特に物語の終盤において顕著である。
- 14 C. David Benson, op. cit., p. 234-235.
- 15 Cf. Marie Borroff, *Sir Gawain and the Green Knight: A Stylistic and Metrical Study*, Archon Books, 1962; rpt. 1973, pp.60-64. 拙論、「前半行に現れる「人」を表す名詞を修飾する形容詞(1)―中英語頭韻詩の場合―」、『朝日大学一般教育紀要』、第27号、(2001)、pp.41-46. 拙論、「前半行に現れる「人」を表す名詞を修飾する形容詞(2)―中英語頭韻詩の場合―」、『朝日大学一般教育紀要』、第28号、(2002)、pp.45-48. 拙論、「後半行における「人」を表す名詞を修飾する形容詞―中英語頭韻詩の場合―」、『朝日大学一般教育紀要』、第30号、(2004)、pp.1-9.
- 16 Benson はこの引用例について、'Formally, Lancelot is a 'Crysten' knight, but the noun is clearly more important than the adjective.' と結論付けている (C. David Benson, op. cit., p.238.)。